

浜本まり子（金吉順 [キム・キルスン]）さんの思い出

清水，展
九州大学

<https://doi.org/10.15017/2340944>

出版情報：九州人類学会報. 29, pp.112-116, 2002-07-06. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

浜本まり子（金吉順 [キム・キルスン]）さんの思い出

清水 展

（九州大学）

2001年11月27日、浜本まり子さんが逝去されました。お別れの会の夜も、告別式・埋葬の日も、晩秋の冷たい雨が降っていました。言葉にできない皆の悲痛と哀切の心に寄り添い、語りかけてくるような雨でした。今、あえて悲しみを語るな、ただ消しも忘れもせずに、そのまま心に抱いて生きてゆけばいいのだと、静かに諭すような雨でした。

浜本（当時は宮田）まり子さんが、東大の教養学部文化人類学科に進学してきたのは、1973年でした。私より一年下の学年でした。その頃のまり子さんは、若く、美しく、明るく気さくな性格で、人類学教室の人気者、皆から好かれました。コンパの席で、あるいはゼミや読書会で、彼女がいるだけで、おのずと華やかさと活気が生まれました。それは、彼女が今を大切にしようよ、人生を前向きに生きようよ、勉強も青春も一所懸命やろうよ、というメッセージを常に発していたからだったと思います。

そうした生きる構えのすがすがしさが、浜本満さんを強く魅了したのだと思います。おふたりは、学部時代からのお付き合いを深めて、大学院の時に結婚され、アメリカのノースウエスタン大学に2年間の留学をされました。まり子さんは、まだ幼い崇志君を育てながら、ご自身も勉学を続けられました。イリノイ州エヴァンストンの長く寒い冬のあいだ、ともすれば陰鬱な気分になりかねない満さんを支えたのは、まり子さんの明るさと元気であったと、満さんが話してくれたことを覚えています。

お別れの会の最後のあいさつでも、満さんは、もし生まれ変わって人生をやり直せるならば、医者になってまり子さんを治したい。彼女から多くのものを与えられて生きてきたのに、彼女が病気になったときにほとんど何もしてあげられなかったことが辛い、悔しいと話されました。

満さんが20年近く前に福岡大学に就職して福岡に移り住んでからは、おふたりとも、それまで、縁もゆかりもなかった福岡の街と人が大好きになり、やがて家を建て、永住を決められました。満さんが一橋大学に赴任されても、ご自身は子供たちとともに福岡に残られました。崇志君と智美さんの母親として、また時には父親代わりとして、そして東京から頻りに帰って来る満さんの良き伴侶として、幸せな家庭を築かれました。そうした家族中心の生活でありながらも、バレーボールやテニスなど、ご自身の趣味の生活も楽しみ、また、文化人類学の研究を着実に続けられていました。

その上に、満さんが春夏秋冬の休みで福岡に長期に戻ってくるたびに、在福の文化

人類学研究者や院生らをご自宅に招いて、読書会を開き、夕食をごちそうしてくれました。夏には庭でバーベキューをすることが楽しみでした。午後の早い時間に始まる読書会が、夕食の後は軽く飲みながら、いつも夜遅く 11 時 12 時まで続けました。浜本邸が福岡の文化人類学のもうひとつの拠点であり、その中心には、いつもまり子さんがいました。時に激しい議論の応酬がある読書会が、十数年続いてきたのは、まり子さんの人徳と尽力のおかげです。

私自身、その読書会から様々な刺激を受け、多くを学びました。そして、読書会のメンバーが中心となって、一般教養科目用のテキスト『文化人類学のコンセンサス』（1994）を編むことになったのも、まり子さんの取りまとめによるものでした。読書会メンバーが、ともすれば、研究センターであったのに対して、まり子さんが教育の大切さを説き、人類学の面白さと考え方を分かりやすく伝える教科書を作りましょうと説得したのです。そして現在、ジェイムズ・クリフォードの『文化の窮状』の翻訳校正が進んでいます。翻訳は減点ゲームみたいなものだから、やりたくないなという皆を説得したのも、読書会のあとで夕食の食卓を準備するために、忙しく台所と居間を往復していた彼女でした。彼女が誘うと、まず満さんが従い、ついで清水、太田、古谷、慶田と説き伏せられてしまうのです。不思議な力の人でした。

まり子さんは、いつも前向き、積極的で、その時、その時の仕事や役目に全力で取り組んでいました。子供さんが幼い時には良き母親であることが優先していたように見受けられました。しかし、子育ての負担が軽減するにつれて、文化人類学の研究により多くの時間とエネルギーを注ぐようになりました。1980 年代の末頃から、非常勤講師として教えに行くようになり、研究にも完全復帰してきました。

彼女の研究の中心は、在日朝鮮人のアイデンティティ形成の過程を、歴史的な背景をふまえつつ、個々人の個別、具体的で切実な経験に即して考察しようとするものです。とりわけ本名宣言に焦点を当てた諸論文は秀逸です(1994, 1995, 1996)。彼女によれば、本名宣言とは、日本人から排除される在日朝鮮人が、理不尽な差別と抑圧に立ち向かい戦う主体として自己を新たに確立しなおすこと、それによって不当なダブルバインド状況からの脱出を可能にする実践であることを明らかにします。ちょうど割礼儀礼が、真の男性性と女性性を欠いている男児と女児を、それぞれ真正の男性と女性にするように、本名宣言は、日本社会において確たる実体を持たず象徴にすぎない「朝鮮人」を、自らが引き受け、名乗り、差異化することで、真に実質化してゆくこと、すなわち「人間改造」を自らに施す再生あるいは新生の儀礼であると喝破するのです。当事者たちの語りに耳を傾け、その声の真意を汲み取ろうとする彼女の真摯な姿勢は、立論の展開の明晰さと合わさって、読む者に深い共感的理解を生み出します。

彼女の研究は、自ら在日であることを引き受け、当事者でもある自分の経験と感覚に照らし誠実に考えることと、人類学者として対象と距離を保ち論理的に考えることを同時に、あるいは振り子のように繰り返す運動として展開されています。それは、人類学を実践することが異文化を理解することではなく、自己を解放し、社会を変革してゆく志を実践と結びつける作業となっているのです。あるいは、現実の不平等や不正義を撃つために、それがいかに文化的に構築され、さらには政治・経済的利害と結びついて、差別や抑圧を自然なものとし隠蔽してしまうのかを明らかにしようします。根源的に考えるという意味で、とてもラディカルな論考を展開しながら、決して誰かを糾弾するわけではありません。文化によって自明視させられ、自然化させられている事象を、再度、問題化しようとするのです。そうした際の思考のラディカルさや厳しさと、優しく暖かな人柄との組み合わせも、また彼女の魅力のひとつでした。

学に対するまり子さんの姿勢と研究の軌跡を見ると、フィリピン北部ルソンのイロンゴット族のあいだで長期のフィールドワークを行なったレナト・ロサルドとミシェル・ロサルド夫妻のことを思い出します。ふたりは、30ヶ月を越える長期のフィールドワークによって得られた、イロンゴットの首狩りについての深い理解を、それぞれきわめて質の高い民族誌として発表しています。けれど、その後、レナトはチカーノとして、ミシェルは女性としてのアイデンティティとポジションを自覚した仕事へと人類学のあり方を大きく変えてゆきます。しかしミシェルは、フェミニスト人類学を先導する活動のさらなる展開が期待されていた矢先に、フィールドワーク中の事故のために早世してしまいます。ミシェルが女性であることを突きつめて考えたように、まり子さんは在日であることを深く考えぬいたのでした。

まり子さんが全力で走りぬけた50年の人生の最後の10年あまりは、人類学をすることをとおして、彼女自身と社会とを良きものへと変えてゆこうとする意志に貫かれていました。社会性のある人類学、コミットメントの人類学を、肩肘張らずに、柔らかな物腰で粘り強く追求するまり子さんは、人類学の今後のあるべき姿を先取りして示してくれていました。まり子さんを失ってしまったことは、九州の人類学にとってとても大きな痛手であり喪失です。

残された者たちのあいだで、喪失と不在がもたらす悲しみ、まり子さんがいないという「空っぽの」感覚が失せることはありません。けれど、それと同じように、彼女の志が消えてしまうこともありません。折にふれて彼女を思い出すことは、彼女が創ろうとしていた人類学を思い起こすことであり、私たちが進むべき道を確認することでもあります。

中国語でさようならば、再び見る、また会いましょうという意味だそうです。そん

な気持ちで、まり子さん、とりあえず、さようなら、そして、ありがとう。

2002年5月12日

—浜本まり子さんの履歴と業績—

〈履歴〉

- 1951年6月23日生 本籍：大韓民国
1976年3月 東京大学教養学部教養学科卒業
1976年4月～1981年3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程
(1978年9月～1980年6月 米国ノースウェスタン大学大学院)
1989年4月～2000年3月 福岡女学院短期大学非常勤講師
1990年9月～1992年3月 国立福岡中央病院付属看護学校非常勤講師
1991年4月～1992年3月 国立ガンセンター付属看護学校非常勤講師
1991年4月～1999年3月 福岡女子大学非常勤講師
1991年4月～1998年3月 中村学園大学非常勤講師
1998年4月～2001年11月 九州共立大学経済学部助教授

<業績>

著作

- 1989年10月 翻訳(共訳) ロマヌッチロス編『医療の人類学』海鳴社。
1991年1月 論文「ドウルマ族の起源伝承」波平恵美子編『伝説が生まれる時』福武書店。
1991年9月 論文「子どもにもっと未知のもの異質なものととの出会いを」『げんき—少子化時代の子育て』No. 17, エイデル研究所。
1993年3月 論文「ライフサイクルと通過儀礼」波平恵美子編『系統看護学講座』、医学書院。
1993年11月 論文「文化人類学と性」『セクシュアル・サイエンス(特集：性科学の周辺)』日本アクセル・シュプリングァー。
1994年4月 共編著『人類学のコモンセンス』学術図書出版社。
1994年 論文(共著)「大阪、生野の『日本人』と『朝鮮人』」『放送大学研究年報号』第12号、放送大学。
1994年12月 論文「本名宣言：在日朝鮮人のアイデンティティに関する一考察」『九州人類学会報第』第22号、九州人類学研究会。
1995年5月 論文「人はいかにして自らが生れ育った場所で異邦人たりうるか：在日朝鮮人の名のりの問題」中西敏夫、長島信弘編、『社会規範：タブーと褒賞』藤原書店。
1996年11月 論文「在日朝鮮人：在日朝鮮人のアイデンティティの問題」青木保ほか(編)『移動の民族誌』岩波講座文化人類学・第7巻、岩波書店。

1998年1月 翻訳（共訳）リュック・ド・ウーシュ著『アフリカの供犠』みすず書房。

2001年12月 論文「人生と時間」波平恵美子編『系統看護学講座』（改訂版）、医学書院。

学会発表など

1992年4月 'The Ineractional Aspects of Ethic Identity formation among Japanese Korean'
The Annual meeting of the Association for Asian Studies, Washington D.C.

2000年5月 「民族概念における差異と帰属：日本における「在日朝鮮人」をめぐる語りの分析
を通して」日本民族学会第34回研究大会（於・一橋大学）。

最近の主な研究

一筑豊地方の在日朝鮮人・韓国人の間での、強制連行の過去を探究する運動について（北九州）

一朝鮮文化をボランティアで小学校などに紹介する運動をしている人々に関するフィールドワーク（北九州）

